

博士學位論文審査要旨

申請者： 小屋多恵子

論文題目： **The Acquisition of Basic Collocations by Japanese Learners of English**
(日本人英語学習者の基本コロケーション習得)

審査員：

主査	早稲田大学教授	PhD (Linguistics)	University of Wisconsin	矢野安剛
副査	早稲田大学名誉教授	博士(学術)	早稲田大学	篠田義明
副査	早稲田大学教授	MA (Modern and Medieval Languages)	Cambridge University	Paul Snowden
副査	早稲田大学教授	PhD (Applied Linguistics)	Edinburgh University	中野美知子
副査	早稲田大学教授	PhD (Applied Linguistics)	University of London	村田久美子

I 本論文の目的

本論文は、その重要性については多くの研究者が主張しているものの、未だに研究の余地が多い英語のコロケーション問題を理論的かつ実践的に研究調査し、日本人英語学習者にとっての基本的なコロケーションとは何か、日本人英語学習者のコロケーション習得過程とはどのようなものか、効果的なコロケーション指導とはどのようなものか、を解明することを目的とする。

II 本論文の構成

本論文は、以下に示すように、序章、結論を含めて9章から成り、データ分析の付表AからLを併せて総ページ 417 ページから成る。

論文目次

Contents

List of Tables	v
List of Figures.....	vii
Acknowledgements.....	viii
Chapter 1. Introduction	
1.1. General background.....	1
1.1.1. Vocabulary acquisition research since the 1980s.....	1
1.1.2. Importance of collocation studies and related problems	2
1.1.3. Change of vocabulary treatment for Japanese learners of English in the government guidelines for foreign language teaching.....	4
1.1.4. Lack of pedagogical consensus on collocation in Japan	6
1.2. The main research questions and organization of the chapters	7

Chapter 2. Literature review (1): Definition of *collocation*

2.1. Introduction	9
2.2. Terminology of three major groups of phraseology	9
2.2.1. Collocation, idiom and free combination.....	10
2.2.2. Terminology problem.....	25
2.3. Previous studies on collocations	25
2.3.1. Descriptive studies.....	25
2.3.2. Semantic studies	41
2.3.3. Computational studies.....	51
2.3.4. Lexicographic studies.....	64
2.3.5. Pedagogical studies	75
2.4. Importance of collocation.....	85
2.5. Summary	88

Chapter 3. Literature review (2): Empirical research on collocation

3.1. Introduction	93
3.2. Empirical research on collocation to date.....	93
3.2.1. Collocation research mainly in terms of L1 influence	93
3.2.2. Collocation research in terms of several factors including L1 influence	99
3.2.3. Other collocation research.....	108
3.2.4. Summary.....	111
3.3. State of collocation in Japan to date.....	115
3.3.1. Collocation research in Japan	115
3.3.2. Description of collocations in collocation dictionaries and English-Japanese dictionaries.....	119
3.3.3. Summary.....	122

Chapter 4. Pilot study

4.1. Introduction	123
4.2. Definition of collocation in the present research.....	123
4.3. Pilot Study I: Corpus-based research.....	124
4.3.1. Pilot Study I-1: Same leveled six English I textbooks	125
4.3.2. Pilot Study I-2: English I textbooks vs. English II textbooks	128
4.3.3. Pilot Study I-3: Revised English I textbooks vs. former English I textbooks.....	130
4.3.4. Pilot Study I-4: History textbooks in the UK.....	133
4.3.5. Summary of the four pilot studies	137
4.3.6. New research questions raised by the four pilot studies.....	139
4.4. Pilot Study II: Empirical research	141
4.4.1. Pilot Study II-1	142
4.4.2. New research question raised by Pilot Study II	147

Chapter 5. Methodology: Phase I. Corpus-based research

5.1. Introduction	150
5.2. Purpose and research questions.....	150
5.3. Materials: Corpus.....	152
5.3.1. British National Corpus (BNC).....	152
5.3.2. Making the TIME corpus.....	154
5.3.3. Making the English I textbook corpus	155

5.4. Selection of collocations.....	156
5.5. Procedure.....	159
Chapter 6. Results and discussion: Phase I. Corpus-based research	
6.1. Introduction	161
6.2. Results	161
6.2.1. Analysis of the BNC.....	161
6.2.2. Analysis of the TIME corpus	164
6.2.3. Features of collocations in the BNC and the TIME corpus	167
6.2.4. Are high-frequency collocations topic-oriented?.....	169
6.2.5. Do collocations occurring in English textbooks for upper secondary school students in Japan deviate from those of native-speaker English?.....	170
6.2.6. Summary.....	176
6.3. Discussion	178
6.4. Basic collocations determined by analyses of corpora	183
Chapter 7. Methodology: Phase II. Empirical research on the development of learners' collocational knowledge	
7.1. Introduction	186
7.2. Research questions.....	186
7.3. Selected collocations.....	187
7.4. Materials	191
7.4.1. Test A: Vocabulary size test.....	191
7.4.2. Test B: Productive collocation test.....	193
7.4.3. Test C: Receptive collocation test.....	194
7.5. Subjects.....	194
7.6. Data collection procedure.....	195
7.7. Scoring procedure	196
Chapter 8. Results and discussion: Phase II. Empirical research on the development of learners' collocational knowledge	
8.1. Introduction	199
8.2. Results	199
8.2.1. Research question 1	199
8.2.2. Research question 2.....	205
8.2.3. Research question 3	208
8.2.4. Research question 4.....	212
8.2.5. Extra finding.....	219
8.3. Discussion	221
8.3.1. Discussion of research questions	221
8.3.1.1. Research question 1.....	221
8.3.1.2. Research question 2.....	223
8.3.1.3. Research question 3.....	226
8.3.1.4. Research question 4 and extra findings.....	228
8.3.3. Discussion of ease or difficulty of collocation acquisition in reception and production in the different vocabulary groups	233
8.3.4. Summary of the collocation acquisition in the different vocabulary level groups.....	243
8.3.5. Pedagogical implications.....	245

Chapter 9. Conclusions

9.1. Overview	250
9.2. Pedagogical implications for effective compilation of English textbooks	254
9.3. Limitations of the study	256
9.4. Future research	258

References	261
------------------	-----

Appendices

Appendix A	276
Appendix B	301
Appendix C	343
Appendix D	368
Appendix E	393
Appendix F	394
Appendix G	401
Appendix H	406
Appendix I	410
Appendix J	413
Appendix K	414
Appendix L	417

III 各章の概要と論評

第1章（序章）

本章では、コロケーションの研究意義・目的を、語彙習得、コロケーション研究の国内外の実情ならびに数多く存在する問題点の提起によって、明らかにしている。

コロケーションとは、第2章以降に詳述してあるように、言語の語彙の使用に関わるものである。1980年代以降、英語教育において語彙習得への関心が高まり、多角的な研究が行われるようになった。それは、1970年代から盛んになった語用論研究が、言語使用およびコミュニケーションにおける言語の機能に焦点を当てたことにより、その中心的役割を担う語彙への関心が高まったことによる。さらに、コンピュータ技術の発達により、大量の言語データがコンピューター化されたコーパスとして利用可能になり、語や句の使用実態を客観的に分析することが可能になったことも語彙研究を飛躍的に発展させた。それに伴い、語彙習得の研究も盛んになり、その一環としてのコロケーション習得の研究も進み、言語学をはじめ、社会学、心理学、教育学などのさまざまな視点から横断的、総合的に研究が進められてきた。

しかし、近年とみに盛んになったコロケーション研究は様々な問題を含んでいる。本論では、その主要なものとして次の4点を指摘している。

- (1) コロケーションの定義が曖昧である。
- (2) イディオムやフリー・コンビネーションとの区別がはっきりしていない。
- (3) コロケーションに対する用語が統一されていない。
- (4) コロケーションはその言語の母語話者の直感に帰属するものであり、非母語話者学習者には理解したり発表したりすることが難しい。

実際、ここ20年間教育的に重要なコロケーションの習得メカニズムを解明するために、英語母語話者や英語学習者のデータが分析されてきたにもかかわらず、コロケーションの問題に適切な答えを出すことは難しく、体系的なコロケーション像が確立したとは言いがたい。

このことは、日本の英語教育にも伺い知ることができる。例えば、英語の教科書間でコロケーションに

対する用語の統一が取れておらず、「連語」「熟語」「慣用句」「口語表現」など様々である。また、文部科学省（旧文部省）学習指導要領にも「連語は基本的なものを選択して指導する」と書かれてはいるが、何が基本的で、どのくらいの数を指導すべきなのか全く明らかにされていない。このことは、日本人英語学習者を対象にしたコロケーション研究があまり行われていないこと、その結果、日本人英語学習者に体系的なコロケーション指導は行われていないことを示していると本論は見る。

本章では、語彙研究および語彙習得研究の経過を略述し、現状分析から問題点を抽出し、本研究の意義および目的を述べている。簡潔にして要領を得た序章と見えよう。

第2章（先行研究Ⅰ）

本章は、「コロケーションとは何か」を解明するために以下の3つの観点から先行研究を概観している。

- (1) イディオムとフリー・コンビネーションの区別とそれに伴う問題点
- (2) 各研究分野におけるコロケーション研究
- (3) コロケーションの理論的研究意義

まず、(1)では、先行研究の調査から、およそその研究が「語の意味が構成要素から理解できるか（semantic opacity）および各構成要素が他の語と交換可能であるか（collocational restriction）」の2点を判定基準としていることを突きとめた。各研究はこの基準を基に、統語的なつながりの強さ、言語による特異性、頻度などを加えて、コロケーション、イディオム、フリー・コンビネーションの区別を試みている。しかしながら、これら3つはもともと一つの連続体を形成しており、これらの間に境界線を引くことは難しい。それは、この基準が絶対的な基準ではなく、程度が問題になる相対的な基準であるため、コロケーションの厳密な定義がこれまでなされなかったからである。そのため、コロケーションはこれまでイディオムに含めて扱われてきたり、数種の異なる呼称が使用されてきたりして混乱を招いてきたと批判している。

次に、(2)では、コロケーション研究を次の5つの研究分野に分けて、それぞれの概要を述べている。記述的研究、意味論的研究、コンピューターを駆使した研究、辞書編集を目的とした研究、教育的研究、の5分野である。ここでは、Firth (1957)とその定義を踏襲し、更に新たな分析を試みている研究者のコロケーション研究をまとめている。ここでは、Firth のコロケーション研究が不十分であるとし、意味論的なカテゴリーの中でコロケーションを捉えようとする研究者の試みと1990年以降、コンピューターの発達と結びついて、コロケーションを環境や使用者の意図を考えようとした意味論的情報（semantic prosody）の研究をまとめている。ここでは、コロケーション研究に関する要素（collocate, node, span）の定義、コロケーションの統語的枠組み、自動コロケーション抽出法など、コンピューターを使用して、客観的なコロケーションを捉える試みをまとめている。ここでは、コロケーションの数、情報などを辞書の中でいかに効果的かつ体系的に扱えばよいのかについて、これまでの辞書編集者が試みてきたことをまとめている。ここでは、教育的な視点から、コロケーションを効果的に指導する方法をレキシカル・アプローチの提唱者を中心にまとめている。

最後に、記憶、言語の流暢さと使用の適切さ、語彙モデルや指導の効果などの点でコロケーションがいかに重要であるかについて関連する先行研究をまとめている。

このように、多くの研究者がコロケーションを研究し、その重要性を主張しているが、コロケーションには主に、語の組み合わせの頻度、結びつきの強さ、連続性と距離などコンピューターを使用して客観的に捉えられる「絶対的判定基準」と、語の組み合わせの意味予測、統語的なつながり、制限要因など主観的に捉えなくてはならない「相対的判定基準」の2種類が存在すると本論は考えている（第4章参照）。

先行研究はかなり詳しく紹介されているが、本論執筆の必然性へとつなげていくためにはそれらの研究の短所やカバーしていない部分をもっと果敢に批判しても良かったのではないかと感じる。

第3章（先行研究Ⅱ）

本章では、2章の理論的な先行研究を基に、実際に英語母語話者や英語学習者に様々なテストを行い、その結果からコロケーションのメカニズムや効果的な学習方法を主張している国内外の実証的研究報告をまとめている。

まず、海外で報告されているコロケーションの実証的研究を主に次の2点に分類している。

英語学習者がコロケーションを習得する際の困難さを引き起こす主な原因は母語の影響である。

英語学習者がコロケーションを習得する際の困難さを引き起こす原因は母語の影響だけではなく、他の要因にある。

このうち、¹⁾は、英語のコロケーション習得は、母語の影響を受けて困難を来たすので、多くのコロケーションの中でも特に、母語と英語で異なるコロケーションを優先的に習得すべきであると主張している。一方、²⁾は、コロケーション習得には、母語の影響のほかに、学習者の成長（年齢）の度合い、総合的な英語力、コロケーションの意味的・統語的複雑さ、頻度、指導のあり方、コロケーションの精通度、構成要素の意味の中核性、有標性と無標性、英語力不足による過剰一般化・回避などのさまざまな要因があり、対処の必要を指摘している。³⁾とが共通しているのは、コロケーションを指導する教師の役割の重要性であり、教師はこれまで軽視されてきたコロケーション指導に様々な工夫を施す必要があるという指摘である。例えば、学習者にコロケーションを明示し、なるべく目に触れる回数を多くして長期記憶に訴えるようにすることや、英語母語話者の使用頻度の高いものから学習者に段階的に提示できるようシラバスに組み込むことや、reading や listening による大量のコロケーションのインプットを図ることなどである。

一方、日本国内のコロケーション研究は、海外での豊富な研究量に比べると、かなり少ない。もともと1980年代以降の日本でのコロケーション研究は、主に記述的分野と辞書編集分野の2つであった。記述的分野は、日本ではまだコロケーションの概念や定義が曖昧であり、コロケーションはイディオムやフリー・コンビネーションと合わせて様々な呼び方をされてきた。そのため、コロケーションを再定義して明確な概念を提供する必要があった。以上の理由から、外国（特にイギリス）で提唱された定義を基に、適切なコロケーションを定義しようという試みがなされている。また、辞書編集分野では、どのコロケーションをどのくらい、どのような情報とともに限られた紙面に載せるかが問われてきたが、コーパスが次第に発展し、普及したことと、コロケーションの重要性が多く主張されてきたことによって、日本人英語学習者に使用頻度の高いコロケーションを明記する辞書が増えてきている。また、この流れに伴い、2000年以降少しずつ教育的視点からのコロケーション習得に関心が集まるようになり、学習者コーパスを駆使した分析や、教授法を考える傾向が出てきている。

先行研究のレビューに関しては、2章の理論的研究と3章の実証的研究報告を詳細に紹介してきたが、レビューが細かすぎてその目的と細部の関連が分かりづらい嫌いがあるし、もう少し論者の批判的意見を入れるべきではなかったか。ともあれ、本文中40%強のページ数、膨大な分析データを含めても30%弱のページ数を割いた先行研究紹介は今後のコロケーション研究者にとって文献学的価値があるとも言える。

第4章（パイロットスタディと課題設定）

本章では、2章および3章で概観してきた先行研究に基づき、これから行う調査の根本をなすコロケーションの定義を設定し、2種類のパイロット・スタディの結果を報告し、新たな調査への研究課題を設定している。

本論は、イディオム、コロケーション、フリー・コンビネーションを連続体と捉え、3者を区別する基準を語と語の結びつきの固定化の度合いと意味が文字通りであるか否かに求めている。例えば、spill the beans はその結合が固定化し、文字通りの意味はもはやないのでイディオムであり、catch a bus/train/plane などはゆるやかながら固定した結合で文字通りの意味なのでコロケーションであり、

analyze や describe は murder、accident、adventure などいろいろな語と自由に結合し、意味も透明なのでフリー・コンビネーションである。コロケーションの定義には絶対的、相対的判定基準の両方を考慮している。すなわち、語の組み合わせの頻度、結びつきの強さ、連続性と距離などの「コンピューターを使用して客観的に捉えられる絶対的判定基準」および、語の組み合わせの意味予測、統語的つながり、制限要因などの「主観的に捉えなくてはならない相対的判定基準」の2種類である。主観的に捉えなくてはならない「相対的判定基準」は人によって判断が異なるため、これまでその微妙な判断は英語学習者には習得が困難であると考えられてきた。しかし、コンピューターを使用して客観的に捉えられる「絶対的判定基準」によって、英語学習者がはっきりコロケーションの概念を把握することが可能になったと論者は見ている。したがって、本論では、コンピューターを使用して客観的に捉えられる「絶対的判定基準」を中心に、純粋なイディオム (pure idioms) すなわち、構成要素からその意味を理解できない、他の類義語との交換を認めないもの、とフリー・コンビネーションを除いた、広い語のコンビネーションを対象にした。このような考え方に基づいて、次の2つのパイロット・スタディを行った。

1 つ目は、日本人英語学習者が使用する教科書の分析によって、どのコロケーションが基本的なもので、どのくらいの量のコロケーションが、どのように提示されているのか、というコロケーションの現状を調べたものである。それは次の4つの方法で行った。

- 「高校英語 I」の6つの教科書間でのコロケーションの質・量・取り扱い方の比較
- 「高校英語 I」の教科書と「高校英語 II」の教科書間でのコロケーションの質・量・取り扱い方の比較
- 学習指導要領 2003 年度改定前後の「英語 I」のテキストでのコロケーションの質・量・取り扱い方の比較
- 「高校英語 I」のテキストとイギリスで使用されている歴史の教科書間でのコロケーションの質・量・取り扱い方の比較。

現在、日本の高校進学率は97%を超え(http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/main8_a2.htm)、必修である「高校英語 I」は高校生のほとんどが必ず学習する科目であり、その教科書は日本人英語学習者の基本教科書であると考えられる。よって、本論では「高校英語 I」を分析の対象に選んだが、分析の結果以下のことが明らかになった。すなわち、取り扱われているコロケーション、その量、取り扱い方は教科書間でまちまちであり、コンセンサスが全く取れていない。コロケーションはかなり軽視されている。British National Corpus (BNC)などのコーパスと比較すると、英語母語話者の使用頻度が高いコロケーションに準拠しておらず、コロケーションの概念や指導が迷走していることを物語っている。そこで、論者は、これまでの先行研究から、数あるコロケーションの中で、日本人英語学習者が学ぶ必要のあるコロケーションを特定し、それを段階的に提示する必要を感じ、まず英語母語話者の使用頻度が高いコロケーションにはどのようなものがあるのかを調べ、それを参照した。

論者は、「コロケーションは英語を母語とする人々の固有の言語使用を反映したもの」という考えに基づき、日本人英語学習者のコロケーション習得も英語母語話者の頻度の高いコロケーションを参考にすべきだと考えている。したがって、英語母語話者のコロケーション使用を客観的に把握できる、コーパスを使用した量的研究に頼ることにした。

2 つ目のパイロット・スタディは、3 章で取り上げた「英語学習者はコロケーションをどのように習得していくのか。習得に関わる要因はどのようなものが見られるのか」に基づいて、日本人英語学習者のコロケーション習得のメカニズムを探ったものである。それは、

- 日本人英語学習者の一般語彙習得とコロケーション習得にはどのような関係があるのか
- 異なった語彙レベルの日本人学習者の受容コロケーションと発表コロケーションには日本語はどのような影響を与えるのか

適切なコロケーションを知らない学習者はどのようなストラテジーを使うのか、異なった語彙レベルのグループ間で、ストラテジーの違いがあるのか

の3点の研究課題を設定し、「高校英語Ⅰ」*Crown* から抽出した26のコロケーションをターゲットとし、語彙レベル判断テスト、受容コロケーション・テスト、発表コロケーション・テストの3種類を被験者に行って分析した。その結果、次の結果が得られた。

学習者の語彙レベルが上がるにつれ、習得されるコロケーションも多くなる。

語彙レベルの低い学習者はコロケーションを発表する前に諦めてしまう傾向があり、語彙レベルの高い学習者ほど母語に頼る傾向が見られる。

日本人英語学習者は、一般的に間違いを犯すことをとても嫌がるため、コロケーションがわからない場合でも、類義語を使って言い表そうとしたり、他の表現を使って説明したりというストラテジーは使わず、諦めてしまう傾向が見られる。

このパイロット・スタディ2で扱ったコロケーションが、*Crown* という1教科書から抽出したもので、日本人英語学習者に必要なコロケーションをベースにしていないこと、コロケーションの種類を日本語と一致するかしないかだけに頼って選んだこと、および語彙レベル・テストをより日本人英語学習者に合ったものを選択すべきだったことなどを踏まえて、次章から、より組織的な研究を行うこととした。

論者は、「コロケーションは英語を母語とする人々の固有の言語使用を反映したもの」という考えに基づいて論を進めているが、「外国語としての英語」を使う日本人英学習者が必要とするコロケーションが果たして英語母語話者の頻度の高いコロケーションそのままののだろうかという疑問が残る。非母語話者の英語のコーパスが入手困難な現状では致し方ないとは言え、日本の英語教育界に蔓延している母語話者の英語は「ほんもの」、それ以外の話者の「にせもの」との固定観念を学習者に植え付ける恐れがないとは言えない。また、母語話者の英語使用の実際がそのまま教科書に採用できるものでもなく、なんらかの教育的観点からの修正が施されなければならないが、その点の言及がない。

第5章（研究Ⅰ：調査方法）

本章は、「日本人英語学習者が習得すべき基本的なコロケーションとは何か」を考えるために、英語母語話者による使用頻度の高いコロケーションと、学習指導要領の「基本的なコロケーション」に従って編集された日本の英語の教科書で扱われているコロケーションを比較検討している。数あるコロケーションの中で、重要度が高い「動詞＋名詞」のコロケーションに限定し、次の3つの研究課題を設定した。

英語母語話者の使用頻度の高いコロケーションはどのようなものか。

英語母語話者の高頻度使用のコロケーションにはどのような特徴があるか。

文部科学省指定の「高校英語Ⅰ」の教科書で使用されているコロケーションと英語母語話者の使用頻度の高いコロケーションとはどのような違いがあるのか。

英語母語話者のコロケーション使用を客観的に調べるために、BNC と世界で有数の発行部数を誇るTIME 誌をコーパス化したものを使用し、高校英語Ⅰの教科書は、パイロット・スタディで扱った4つの教科書をコーパス化したものを使用した。コロケーションの選択は、日本人英語学習者に必要な語彙リストを示した『JACET8000』（2003）に出てくる全名詞と結びつく動詞を、コーパスを基に編集されたコロケーション辞書2冊（*COBUILD English Collocations on CD-ROM* (1995); *Oxford Collocations Dictionary for Students of English* (2002)）と英語母語話者の直感を基にした辞書2冊（*The BBI Dictionary of English Word Combinations* (1997); *The Kenkyusha Dictionary of English Collocations* (1995).）に共通に登場するコンビネーション1572を選定コロケーションとした。そのコロケーションの出現頻度をBNC、TIMEコーパス、高校

英語 I コーパスのそれぞれによって調査した。

論拠としてのデータ収集のために、膨大な資料をコーパス化し、比較しているが、その時間的、労力的努力は賞賛に値する。

第 6 章（研究 I：分析結果）

本章は、5 章の調査方法に従って調査をした結果をまとめたものである。まずは、英語母語話者の使用頻度が高いコロケーションの抽出、そのコロケーションの特徴の特定、の研究課題に答えるために、BNC と TIME コーパスの中から 1572 のコロケーションの頻度を明らかにした。に関する結果は次の通りであった。

- 1) BNC と TIME コーパスにおいて、高頻度コロケーションは基本的な語から成り立っている。（JACET8000 によると、2000 語レベルまでの動詞名詞で成り立っている。）
- 2) BNC における高頻度コロケーションと TIME コーパスにおける高頻度コロケーションは多く共通している。
- 3) TIME コーパスの中で、コロケーションの頻度が高ければ高いほど、トピックを問わず使用される傾向が強い。トピック志向のコロケーションは、その分野に特化したものであるため、ESP に役立つ可能性がある。

次に、文部科学省指定の「高校英語 I」の教科書で使用されているコロケーションと英語母語話者の使用頻度の高いコロケーションとを比較し、「高校英語 I」で扱われているコロケーションには次のような特徴があると述べている。

- 1) どの教科書でも、扱われているコロケーションの数が少ない。少ないながらも、扱われているコロケーションの構成要素である動詞と名詞のレベルは基本の 2000 語以内の語である。
- 2) それぞれの教科書で扱われているコロケーションには一致が見られない。
- 3) 扱われているコロケーションは一度しか登場しないものがほとんどである。
- 4) 「高校英語 I」で扱われているコロケーションは、BNC や TIME コーパスで使用頻度が高いランクのものである。

その結果、BNC と TIME コーパスでは延べ語数（total tokens）と異なり語数（total types）の差がかなりあるにもかかわらず、使用頻度が高いコロケーションが共通しており、そのコロケーションは「高校英語 I」でも扱われていることを突きとめた。また、高頻度コロケーションは、2000 語までの基本語彙を持っていれば、十分使いこなせると言えることもわかった。問題は、コロケーションの観点からはかなり不十分である「高校英語 I」の教科書で、明示的に提示し、学習者の長期記憶に保存させる必要のあるコロケーション指導をいかに行うかということである。また、学習の初期段階で頻出する日常語や初級の読本では BNC と TIME コーパスをカバーする率が低いことも考慮に入れる必要がある。

以上のコーパスのデータ分析に教育的な視点を加味し、61 の動詞・名詞コロケーションを基本コロケーションとして選んでいる。

7 章（研究 II：調査方法）

本章では、日本人英語学習者がどのようにコロケーションを習得するのかを調べている。3 章で概観したように、英語学習の盛んな国々は、コロケーション習得が英語能力を向上させるための大きな要素と見てその習得のメカニズムを解明しようと様々な実証的研究を行っている。しかしながら、日本ではまだこのような教育的な視点にたった実証的研究は数少ない。そのため、先行研究をもとに以下のような研究課題をたてて調査を行った。

一般語彙能力との関係：一般語彙能力が高い学習者ほど、コロケーション能力も高いといえるだろうか。

受容コロケーション能力と発表コロケーション能力の関係：日本人英語学習者のどの語彙レベルの段階でも、受容コロケーション能力が習得されてから発表コロケーション能力が習得されるのか。

コロケーション能力に影響を与える要素は何か：語彙能力の欠如か、日本語の影響か、コロケーションの構成要素の意味の透明性か、各構成要素の他の語との交換可能性か、またはその他の要素が影響しているのか。

適切なコロケーションを知らない学習者はどのようなストラテジーを使うのか。それは語彙レベルの違う日本人英語学習者によって異なるのか。

この4つの研究課題を実証するために、大学生 130 名を被験者とし、(1)語彙力判断テスト、(2)受容コロケーション・テスト、(3)発表コロケーション・テストの3つのテストを行った。語彙力判断テストは、4章のパイロット・スタディで使用した Nation (1990)のテストを日本人英語学習者用に修正し、これまで多くの妥当性テストを行ってその信頼性が高く評価されている「望月テスト」(1998)を利用した。受容コロケーション・テストと発表コロケーション・テストは、研究Ⅰで特定した 61 のコロケーションを使用し、受容コロケーション・テスト(multiple choice test)と発表コロケーション・テスト(completion test)を作成した。これらを、語彙力判断テスト 発表コロケーション・テスト 受容コロケーション・テストの順番で実施した。

第8章（研究Ⅱ：分析結果）

本章は、7章の調査方法に従って調査した結果をまとめている。まず、統計を使って4つの研究課題について分析した結果は次の通りであった。

- 1) 一般語彙能力とコロケーション能力は相関関係があり、一般語彙能力が高いほど、コロケーション能力も高い。それは、被験者一人一人の語彙能力が持つコロケーション能力と、語彙レベルのグループ間のコロケーション能力の両方から証明された。
- 2) 受容コロケーション能力と発表コロケーション能力は相関関係があり、受容コロケーション能力が高くなるほど、発表コロケーション能力も高い。それは、被験者一人一人の受容コロケーション能力と発表コロケーション能力と、語彙レベルのグループ間の受容コロケーション能力と発表コロケーション能力の分析・比較から証明された。
- 3) 受容コロケーション能力の発達には、一般語彙能力、日本語、動詞の脱語彙化、動詞の中核的意味が、発表コロケーション能力の発達には、一般語彙能力、日本語、動詞の脱語彙化、動詞・名詞の中核的意味、コロケーションの文法的な構造が影響していることが証明された。
- 4) どの語彙能力段階の学習者も、コロケーションを使用しなければコミュニケーションを成立させられない。それは、日本人学習者は他の語を使用してなんとか相手に伝えようとするのが極めて苦手だからであった。また、コロケーションが分からない場合、または曖昧な場合、どの語彙レベルの学習者も、諦めて何も試みない、キーとなる名詞を動詞化する、日本語を直訳する、の3つの方法を採用する傾向がある。

以上の結果をこれまでの第二言語習得理論の観点から更に分析し、それぞれの語彙レベル段階の日本人英語学習者のコロケーション習得の特徴、習得の難易度によるコロケーションの分類を示した。また、次のような教育的示唆が得られた。

- 1) 語彙能力の強化（特に 2000 語レベル 3000 語レベルの学習者）

- 2) 頻度の高いコロケーションを文脈の中で明示的に提示（学習者全般）
- 3) 各コロケーションの特徴に応じた指導

全般的にはリスニングやリーディング活動などの受容コロケーションの強化から始め、スピーキングやライティング活動で利用できる発表コロケーションへと幅広い習得を目指す必要と、2)のような明示的な教授が大切になる。しかしながら、コロケーションによっては、その習得の流れに沿わないものもあるため、コロケーションの特徴を把握し、その特徴に応じて指導法を変えていく必要がある。

4) 語彙能力段階に応じた指導

2000 語および 3000 語レベルの学習者には、語彙の様々な面を習得させ、それを強化する必要がある。また日本語と英語で一致したコロケーションの場合にはそれをプラスに活かし、また一致していない場合には負の転移が起こらないように指導する必要がある。また、学習したコロケーションを定着させるために、記憶のメカニズムに合わせた効果的な反復学習が大事になってくる。4000 語レベルでは、英語の特徴へ移行する過渡期となるため、より確実な語彙力によって日本語の影響を受けずに英語の特徴を正確に習得することに力を入れるよう指導しなければならない。5000 語レベルでは、曖昧なコロケーション能力を確実なコロケーション能力に変えるために、イディオマティシティーの強いコロケーションの冠詞や前置詞に目を向けたり、適切な形容詞を使って表現豊かなコロケーションが使用できるように教えなければならない。

5) 「動詞 + 名詞」のコロケーションの動詞の特徴の指導（学習者全般）

第9章（終章）

本章では、本論の研究内容を総括し、コロケーション研究の意義を確認し、本論の限界を指摘し、今後の研究方向を示唆している。本論には大きく分けて3つの柱があった。第1に、コロケーションの定義の明確化、第2に、日本人英語学習者が習得すべき動詞 + 名詞のコロケーションの特定、第3に、日本人英語学習者の基本的コロケーションの習得過程の解明と実証である。今回得られた結果は、日本の英語教育でのコロケーションに関する諸問題（コロケーションの定義の曖昧さ、基本的なコロケーションに対するコンセンサスや実証研究に裏づけられた習得過程情報の欠如）の解明につながると思われる。また、効果的なコロケーション習得を目指した教科書や単語集の編纂にも貢献できよう。

しかし、日本における英語コロケーション研究はこれまで非常に乏しかった。英語コロケーション研究は継続されなければならないが、論者は以下の3つの課題を考えている。

1) 全種類のコロケーションに関する日本人英語学習者の習得過程の解明

これまでのコロケーション実証研究の多くがそうであったように、「動詞 + 名詞」コロケーションに絞って本研究を進めてきた。しかしながら、コロケーション習得の全体像をつかみ、総合的に効果的な指導を考えることが必要になると思われる。そのため、Benson et. al (1997)が示しているレキシカル・コロケーションとグラマティカル・コロケーションの全種類をターゲットにした実証研究を行う。

2) 習得過程を反映した効果的な教材の作成

既存の英語教科書は語彙数には注目しているものの、学習指導要領が示す「基本的なコロケーションを選択して指導する」点は全く反映されていない。また、既存の語彙集においても、連語や慣用句が掲載されているが、経験に基づいて選ばれているだけのようである。そのため、コロケーションの実証研究結果から得られたコロケーションの使用頻度、習得困難な要因や順序、語彙レベルに合った習得方法、効果的な定着を図る提示などを反映させた教材作りを行う。

3) 英語母語話者および非母語話者のすべての英語話者が容認するコロケーションの特定

「コロケーションは英語を母語とする人々の固有の言語使用を反映したもの」という考え方が根強い。しかしながら、現在は世界における英語によるコミュニケーションの80%は非母語話者同士と言われている。

る。英語はイギリス人やアメリカ人のような母語話者とのみコミュニケーションするために学ぶのではない。英語は母語として使われると同時に、第二言語として、また外国語として使われている現状を考えると、英語話者すべてに共通する容認度の高いコロケーションを習得する必要がある。世界の英語使用者（母語話者、非母語話者を問わず）が使う英語のコーパス、International Corpus of English が将来作成され、研究に使えるようになれば、より現実に即した、効果的なコロケーションが特定され、指導が可能になるであろう。さらなるコロケーション研究が必要であると論者は感じている。

IV 総評

本論文は、その重要性は認識されながらもわが国ではほとんど研究が進んでいない英語のコロケーション研究に理論および実証的研究の両面から取り組んだものである。海外の先行研究を克明に過ぎるほど調べ、コロケーションを再定義し、日本人英語学習者にとっての基本的なコロケーションとは何か、日本人英語学習者のコロケーション習得過程とはどのようなものか、効果的なコロケーション指導とはどのようなものであるべきか、などについて綿密な考察を展開し、膨大なデータ分析で丁寧に例証している。

本論は、博士学位論文に要求される独創性を備えているのみならず、その学位にふさわしい学問的水準に達していること、およびわが国の英語教育の改善に寄与するという点できわめて応用言語学的性格を備えた研究である。また、本論は日本における英語コロケーション研究の草分けとして、今後のこの分野の研究の発展に寄与するであろうし、同時に、わが国の英語教育の改善にも大いに貢献するであろう。

よって、本論は、博士（学術）の学位論文に相当するというのが審査員一同の一致した結論であることを報告する。